



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 19 主日 B 年 (2024 年 8 月 11 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記上 19 章 4 — 8 節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4 章 30 節—5 章 2 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 6 章 41 — 51 節

命のパン

三つの朗読から

第一朗読の「食べ物に力づけられた彼は」(8 節) に注目してください。食べ物は、生きるために必要なものです。しかし、日常の生活で食べ物に力づけられて生きる決断をすることはあまりないでしょう。神さまがくださる食べ物は、わたしたちの人生の歩みを力づけて、導いてくれる物です。「起きて食べよ」(5、7 節) の命令は、疲れているわたしたちをふるいたさせる神の言葉なのです。

第二朗読の最後の言葉、「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように」(2 節) は、わたしたちのいのちの姿を教えてください。つまり、イエスさまがいのちを献げてくださった、そのいのちでわたしたちは生きるのです。

福音朗読にある「父が引き寄せてくださらなければ」を味わいたいです。「引き寄せる」はギリシア語でヘルコーと言います。「力づくで、自分の方に引っ張ってくる」ことを意味するとても強い表現です。信仰は、その人のいのちをかけた決断から生まれます。これは確かです。しかし、決断の前に神さま側からの関わり、介入がなければなりません。神さまは、わたしたちをイエスさまの方へと引き寄せてくださるのです。そのことに気がついて、初めて人は信仰の決断が可能となります。神の介入と人間の決断。この二つの点から信仰は成り立つのです。

説教：命のパン

47－51 節：

47 節から 51 節を少し分析的に読んでみましょう。

ここでは、「パン」という単語が五回も繰り返されます。こうして、話のテーマはイエスさまがどなたであるかへと転換します。この箇所は、次のような構造に分析できるでしょう。

A 信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである

B あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった

B' これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。

A' わたしは天から降って来たパンである。これを食べるならば、その人は永遠に生きる。

わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。

49 節「荒れ野でマンナ」と 50 節「天から降って来たパン」が対となります。一方は食べても死ぬが、他方は食べても死ぬことはないです。フランシスコ会訳の注釈では、肉体的な死と霊的な死の対比のように説明されています。あまり適切な説明ではないと思います。

BとB'は死の観点から述べられているのに対して、AとA'では「命」の観点から述べられています。

イエスさまは人に命をあたえる方ですが、それは、イエスさまご自身が、ご自分の肉をこの世に差し出して、死んだからです。わたしたちの命は、わたしたちに代わって死なれた方の命をいただいているのです。

おしらせ

8月15日(木)の聖母被昇天のミサは、午前10時半からです。